

新潟中央短期大学

暁星論叢

第60号 抜刷

(平成22年12月)

協働型の表現活動の実践をめぐる考察

—保育士・教員養成課程の学生への意識調査をもとに培われる力に着目して—

齋 藤 竜 夫
と き え 得 紀 子

協働型の表現活動の実践をめぐる考察

—保育士・教員養成課程の学生への意識調査をもとに培われる力に着目して—

齋藤 竜夫
時 得 紀 子¹⁾

はじめに

我が国の子どもたちの表現・コミュニケーション力の不足が叫ばれて既に久しい。しかしこの課題は、将来子どもたちとかがかわる仕事に携わろうとする、保育士・教員養成の大学や短期大学に学ぶ今日の学生たちにさえも見受けられることが少なくないという現実を筆者らは深刻に受け止めている。そして、急激に変化する社会の要請に 대응していくためには、保育士をめざす幼児教育専攻、あるいは初等・中等教育に携わることをめざす教員養成課程の学生が習得するカリキュラムの改革が喫緊の課題であると考えている。

本論ではこの課題解決への手掛かりを探るべく、学生が他者とかがわり、自らを表現していくための力を十分に蓄えることができるよう支援していくために有効と考えられる既存の実践を例に挙げ、これらの取り組みから考察を試みていく。すなわち、先述した厳しい現状を改善すべく、子どもたちの教育を担うことをめざしている保育士・教員養成の大学及び短期大学に学ぶ学生たちを対象として、彼らの表現・コミュニケーション力を培うための有効な教育活動について模索していくものである。具体的には、筆者らの携わる大学・短期大学における既存の表現活動の実践場面の体験を経て、どのような学びを得ることができたかについての学生への意識調査をもとに、その試みの有効性や今後の課題について論考することをめざすものである。

1. 教員養成における表現・コミュニケーション力育成をめざして

(1) 表現・コミュニケーション活動に関する学生への意識調査から

学生の表現・コミュニケーション力の課題について明らかにするために筆者の時得は、表現にかかわる授業科目を受講する学生に意識調査を試みた経緯がある。時得は2006年度から2008年度まで、上越教育大学の学部1年次生約170名、及び免許プログラムの大学院生（3年間で初等教育の教員免許を取得する課程の院生）約50名を対象として、入学直後に実施される、表現・コミュニケーション力を培うための授業¹⁾を毎年の4月及び5月に担当してきた。そしてこれらの授業を実施する前に受講生を対象として、表現やコミュニケーションについて各自の意識を尋ねるアンケート調査を実施した。その質問内容は、「人前で、表現活動（演奏、調べたことの発表など広い意味で）をすることについて」「ボデイラングージ（身振り、手振り）をまじえて表現することについて」「相手の目を見て話

をすることについて」など、学生に対して表現することにかかわる意識を8項目について問うものであった。これらの問いに、得意、やや得意、どちらでもない、やや苦手、苦手の5つの段階で回答を選択してもらった。「どちらでもない」という消極的な回答も含めると、全ての項目において、苦手意識を感じる者は実に半数以上を占める結果となった。

このことから、学部生・院生ともに教員養成課程に在籍しているながら、全ての項目において多くの学生が、自己を表現することや、他者とコミュニケーションを取ることに何らかの苦手意識を抱いているという、憂慮すべき現実が明らかになったのである。

以下は、大学院免許プログラム1年次・学部1年次「音楽」受講生を対象とした、表現・コミュニケーション活動に関するアンケート調査について示すものである。

実施日免プロ（免許プログラムの略称）：2007年12月3日、学部：2007年11月29日
対象者=152名（大学院・免プロ院生19名、学部生133名）

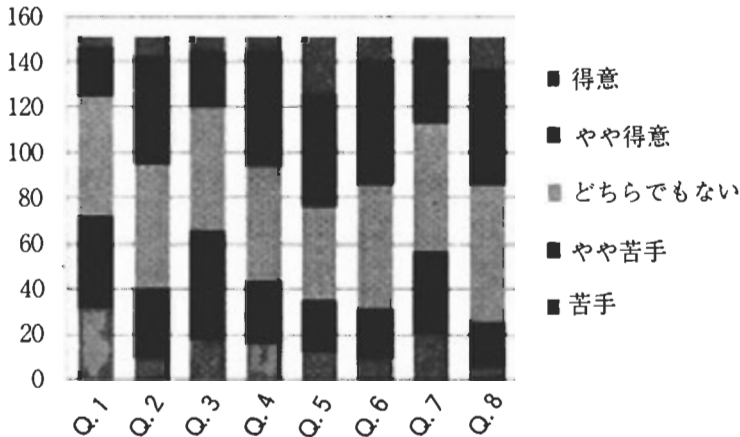


図1. 大学院免許プログラム1年次・学部1年次「音楽」受講生を対象とした、表現・コミュニケーション活動に関するアンケート結果のグラフ

質問項目

- Question 1 ・人前で、表現活動（演奏、調べたことの発表など広い意味で）をすることについて自分は
- Question 2 ・グループ活動などで、人とコミュニケーションをとることについて自分は
- Question 3 ・言葉をつかって他者に何かを伝えることについて自分は
- Question 4 ・ボディランゲージ（身振り手振り）をまじえて表現することについて自分は
- Question 5 ・相手の目を見て話をする事について自分は
- Question 6 ・相手の気持ちを感じ取り取りながら話をする事について自分は
- Question 7 ・グループ活動などで、人の輪の中に入って行くことについて自分は
- Question 8 ・教育実習などの場で、子どもたちと積極的にかかわることについて自分は

教員養成課程に学ぶ学生・院生への意識調査のデータに見られるこうした傾向が年々顕著に見られる一方で、この現状を補うための特別な授業が積極的に増設されることは検討されておらず、多様な表現活動を通じて他の受講生とかかわりながら活動を育むといった演習形式の授業は、現状において極めて限られているのが実態なのである。

（２）新学習指導要領と教師に求められる幅広い表現活動への指導力

一方、学校教育の現場においても、新学習指導要領に掲げられた小・中学校の表現活動には大きな広がりが見られてきている。この新しい動向を受けて、今後教員をめざす学生に、これまで以上に幅広い表現活動の指導力の資質が求められることになるであろう。

折しも今次の指導要領改訂では、身体表現活動を広範囲な音楽活動に導入する方向の新たな提言がなされている。平成21年4月に小学校学習指導要領（音楽科）の改訂と共に、〔共通事項〕という新たな項目が盛り込まれ、表現活動そして鑑賞活動のいずれにも共通する内容が明示された。そして、「各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかかわることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること」²⁾が示されるなど、幅広く体をつかった表現活動の探究が促され、身体感覚を通じた活動がこれまで以上に重視される方向に転じていることがわかる。

一方、他教科の動向にも視線を向けてみると中学校、保健体育科では学習指導要領解説書におけるダンスの項目で、実に16ページにも及んで多様な活動の展開が提示された³⁾。そして小学校の体育科でも低学年において「F 表現リズム遊び」が新設された他、高学年では「即興的な表現」や、「音楽に合わせて簡単なステップや動きで踊ること」などが具体的に明示され、音楽を聴きとって瞬時に動きを創り出す活動が重視されており、創造的な身体表現に向けた改革が打ち出されてきている⁴⁾。

一方、平成23年度からの小学校高学年における外国語活動の本格実施に向け、チャンツなどの歌唱活動と共に英語での指示内容を身体の動作で子どもに応答させるトータル・フィジカル・レスポンスの活用など、音楽と身体表現がかかわった学習も盛んになってきている。

昨今の音楽科、図画工作（美術）科が抱える時数削減という厳しい現状にありながら、その一方で充実が見られる、これらの芸術教科以外の教科・領域と連携した総合表現活動、外国語活動や体育科に組み込まれたダンスの活動にも身体表現の機会が拡大している傾向はむしろ好機と捉えるべきで、広義の表現活動⁵⁾の機会が増えていく可能性を秘めている。

こうした教育現場の新しい実践に備えた教員養成のためには、今後は音楽や美術、舞踊などに分化した授業科目のみならず、総合的な視座からの演習が一層求められていることになるであろう。

(3) 身体表現を生かした実践的な表現活動の必要性

こうした新しい動向を受けて、次に筆者の携わる教員養成系大学の初等教員養成のプログラムにおける具体的な実践事例を取り上げながら、その成果や課題について論じていく。上越教育大学の「初等音楽科指導法」の授業は、学部3年生対象の必修科目であり、前期に全15回が組まれている。受講生170名のうち9割以上が音楽や幼児教育の専門以外の学生であるため、受講生の音楽技能の開きが大きい。この現状を踏まえながら、彼らが卒業後に教壇に立った際、即戦力となる指導法をめぐって様々に探究を重ねてきた。また、新潟県では初等教育に音楽専科制を取っていない現状から、音楽専門以外の学生にも、卒業後に活用ができるための指導力を蓄えてもらうことを意識した授業を展開している。

筆者はこれまで、現職教員を対象とした、小学校のクラス担任が取り組む音楽科の指導法について、教師教育のレベルの講習会の指導講師としても長年携わってきた。こうした経緯からも、小学校の音楽授業においては、西洋クラシック音楽のピアノ奏法を始めとする、高度な技能が伴う指導法をあまねく浸透させることの困難さにも直面してきた。実際、音楽を専門としないクラス担任が授業を行う際、必ずしも高度なピアノ伴奏を伴う指導でなくとも、子どもたちとコンタクトを密にして、身体表現活動を取り入れるなど音楽に感覚を集中させた授業を展開することなどで、多彩な授業が可能になる事例も数多く参観してきた。

教員養成課程の授業においても、学生が子どもたちの教室での活動の様子を映像などで視聴した後、グループによる協働型の学習で、自分たちも身体表現を試みるといった活動は、音楽を専門としない学生にとっても取り組みやすく、かつ有効な基礎を育むことが可能となるものと受け止める。次にこうした多様な表現活動の実践事例について述べていく。

(4) 授業の導入における身体表現活動「音楽遊びの実践事例から」

先述のように「初等音楽科指導法」の授業は、学部3年生約170名を対象に必修科目として開講されているが、この受講生を85名ずつ2クラスに分け、各々全15回を前期に実施している。また、免許プログラムの大学院生は、3年間で初等教員免許に必要とされる単位を取得するため、在籍中のいずれかの学年の前期に「初等音楽科指導法」を受講している。現行では、筆者を含む音楽科教育の2名の教員で学部生と院生を担当している。

筆者は学部生及び院生対象の各々の「初等音楽科指導法」の授業では、大教室の机を全て取り払った空間で約85名を10名前後のグループに分け、授業の初回からの3回にこうした身体表現活動を全面的に取り入れている。具体的には、多様な音楽遊びを取り入れた活動を応用しながら、音楽の基本的な要素であるリズム、音の強弱、テンポなどを体得させる諸活動を積極的に組み込んでいる。

グループ毎に協働で取り組む活動事例のひとつである、身体表現活動の具体的な活動を

記した講義用資料の一部を次の「参考資料1」に掲げる。この「参考資料1」に抜粋した活動は、先述の「初等音楽科指導法」以外においても筆者が実施しており、従って学部3年生は学部1年生の前期においても、こうした身体表現活動を体験している。

この講義は、学部1年生及び大学院（免許プログラム生）を対象とした、ブリッジ科目「音楽」（前期全15回）と称され、毎年4月に発行される、「上越教育大学学生のための音楽」という、手作りの教科書をもとに展開される。平成23年度の教科書の作成に当たったのは、上越教育大学の音楽担当の7名の教員である。本稿ではこの教科書から、時得が担当した「音楽あそび」(pp.47-48.)の箇所より以下に抜粋する。

参考資料 1

イギリスの作曲家トレヴァー・ウィシャートによるさまざまな音楽あそび ～身体表現活動を取り入れた拍感の体得をめざす試み～

ボーイスカウトやガールスカウトの合宿など、幅広いシーンで活用されており、ゲーム感覚で互いの距離を近づけ、自己紹介をし合うことができる活動です。

出典：「音楽あそびするものよっていで 1巻、2巻」トレヴァー・ウィシャート著、音楽之友社 1998。（坪能由紀子・若尾裕 共訳） 本学図書館にもあります。

a) ハロー・ゲーム

- ・リーダーに合わせて一斉に、手拍子を3拍、膝上でも3拍のリズム動作を繰り返します。膝上の3拍の間に、さまざまなことばを組み込んで、ノンストップで繋げて行きます。ゲームのヴァリエーション・自分の名前（たろう、はなこ）好物の食べもの、行ってみたい所や国、好きなアニメ番組

b) 手拍子まわし

- ・手拍子を輪の中の順に出来る限り速く、ドミノ倒しのようにまわすゲームです。ゲームのヴァリエーション・右方向に手拍子をまわす一方で、左まわりには足でトンと床を突く動作を組み込むなど、異なる動作を時間差で逆方向に伝えていく。
- ・目を閉じて、手拍子まわしを試み、その時間差を比べる。どんな発見があるだろう？

c) 音のパーキング

- ・時間空間の中に、グループメンバーの空気を読みながら、短く、鋭い手拍子を即座に埋め込んで行きます。しかし、同時に他の誰かも全く同じタイミングで手をたたいたならば、ダブルパーキングで「アウト!」。両者（あるいは三者）ともゲームから脱落です。

d) 指揮者ゲーム

- ・各自がいろいろな音色（高い声、低い声、太い声、細い声 etc.）を担当し、自分らしい特色ある声で、指揮者のアドリブによる指揮に従って即興で創作していきます。まるでオーケストラのさまざまな楽器を各自が担当するように、参加者全員の声による即興ヴォイス・アンサンブル、体の各部位を楽器に見立てたボディ・インストゥルメントによる即興演奏などを自在に展開することが可能です。

これまでの受講生を観察してきた経緯から、4月初旬にはぎこちなく接していた学生同士も、授業を重ねるに連れて徐々に互いの距離を縮めながら、創作するプロセスを通じて他者あるいは自らと向き合い、互いに学び合いながら多彩なコミュニケーション活動を展

開している様子うかがえる。全15回の授業を通じて、活動の導入時には、音楽づくりの活動の一環としての「音楽遊び」と題した身体表現活動を取り入れて実施している。

これらの諸活動はいずれも協働でグループ毎に取り組むスタイルの身体表現活動であり、続いて展開される音楽学習に向けた集中力を高める目的をもった、「アイスブレイキング」の目的も兼ねている。これらの活動をグループ毎に協働で取り組むことを継続しながら、学生たちは、秋の小学校教育実習等に向けて様々な表現の力を獲得していくのである。

(5) 身体表現活動の実践的授業を体験した学生の意識変化

次に、学部3年生「初等音楽科指導法」学生（各クラス85名 計170名が受講）による受講⁶⁾後の『振り返りカード』から得られた感想を読み取ることで、身体表現活動の実践から得た学生の学びについての考察を試みていく。学生から得られたこれらの回答は実に多岐に及ぶ内容であったため、次の2つの視点から記述を分類して示すものである。

(a) 主として身体表現活動・コミュニケーションに関すること

- ・身体表現とイメージを結び付けることの難しさを感じたものの、実際にやってみると簡単であることがわかった。
- ・実際に表現してみることで、どのような音を入れるかによってイメージが全く変わる。子供に身近なものや音楽を結び付けて考えることの面白さを発見した。
- ・自分の想像や気持ちを体で表現することは、初めは大変かもしれないが、とても大切な活動に繋がる。
- ・始めは「恥ずかしい」と思った動作も、気がつけば笑顔でやっていることに気づいた。
- ・体全部を使って活動することがコミュニケーション力を培うことに繋がることを身をもって体験することができた。この体験を将来、教育に生かしていきたい。
- ・答えが一つではないこと、自分の感じたままに表現してみることの楽しさを感じた。
- ・受講者自身が考え、自分の欲しい音や表したいことを見つけるプロセスは楽しい。
- ・上手、下手、良い、悪い、できた、できない、にとらわれなくてよい。
- ・表現の工夫で、考える場面が多く、既成曲をただたんに演奏する活動より、楽しさが得られた。

人によって感じ方や表現の仕方は全く違う。こうした感じ方の違いはとても大切にしていきたい。

- ・子供たちにも、この表現の授業で学んだような、自由でのびのびとした音楽を経験してもらいたい。
- ・日頃、会話をしなかった人とこの活動を通して話すきっかけになった。きっと子供にとっても同じだと思う。
- ・大学生がこれだけ無邪気に活動できるのだから、子供はもっと楽しく感じるのではない

か。

- ・客観的に他者の様子を見ることで、この人はこう表現するんだ、こんな表現方法もあることを発見した。
 - ・自分自身も動きやリズムを考える活動を行うことで、どのように表現するか、伝えるかを考える重要性を学んだ。
- (b) 主としてカリキュラムの構成や音楽と身体表現、他者とのかかわりなどについて
- ・音楽の活動に「身体表現」「言語の活動」などを組み合わせている授業は初めて。子供の活動の流れとしてはこの方がいいのではないか。教科関連の学習の意義を感じた。
 - ・身体表現活動に「考える活動」を組み合わせていることが驚き。リズムや動きについて、「こだわりをもつ」ことの大切さを学んだ。
 - ・子供には、まずみんなで演奏するというより、表現してみる楽しさを味わえるようにできたらいいと思った。
 - ・「音楽を楽しむ」ことは、個人の体験だけでなくグループ皆の体験でもあるべき。
 - ・音楽教育では誰でもが創造的に音楽に取り組める雰囲気づくりが大切だ。
 - ・自分で身体表現を作ってみて、楽しい活動に「どんな音楽的内容を盛り込むか」が大切だと感じた。
 - ・指導者は教示するのではなく、子供の中から出てきたものを受けて返すことが大切だと気付いた。
 - ・創作作品の発表などでは、集中力が大切だと感じた。いやがおうにも協力し合う必要があり、初めは互いに照れながらの参加であったが、気がついたらグループに強い団結力が生まれていた。

こうした学生の感想のからは、仲間と共に身体表現の発想を得ることの難しさと同時に、実際に動いてみると思いの外、簡単にできたという意見が交錯している。また、学習の活動計画を組み立てることの難しさや、身体表現により、子供の発想力・考える力を培う意義への気付きなどが培われていることがわかる。その一方で、互いの表現を認め合って、自らも自由に表現を探究する喜びを感じている様子や、この体験を元に教育現場で子供たちにも同様に楽しさを体験させてやりたい、という熱意や思いなども育まれている。

(6) 求められる表現活動にかかわる実践的な演習科目の充実

「初等音楽科指導法」におけるこうした身体表現活動の実践によって、学生はバーバル及びノンバーバルコミュニケーションの両方を活発に駆使しながら、思考・判断する様子が見られ、音楽的な表現を深めていく様子が観察された。また、協働型の表現活動から、協調性・社会性が培われており、例えば他者とのコラボレーションによって、相手の考え

を取り入れるなど互いのよい部分を認め合おうとする相互理解に向けた活動の様子が、授業を通じた学生へのパフォーマンス評価からも認められた。しかしながら、これらの単発的な活動では教師として教育現場において、臨機応変に活用する力の獲得に到達するには、なお不十分であり、長期的に継続してこれらの実践に取り組む必要性があるという課題も生じた。それにもかかわらず、現行のカリキュラムでは、学部4年次には学年を通じた必修の表現活動にかかわる科目は全く開講されていない。すなわち、学年全員を対象とした3年次前期の本授業以降、卒業までの必修及び選択科目において、表現活動の機会は一切与えられていないのである。

この課題解決に向けて模索する中で、新潟中央短期大学（以下、「中央短大」と記す）における創作ミュージカルの実践がクローズアップされるのである。この取り組みは、全学体制で地域とかかわりながら長年に渡って取り組んできた点でも優れており、かつ、全国的にも稀有な実践であると捉える。この創作ミュージカルの実践の有効性について次項において取り上げていきたい。

こうした協働型の創作ミュージカルに取り組む伝統は、上越教育大学音楽コースにおいても20年以上に亘って継続して取り組まれている。毎年、年度末の2月に卒業を目前に控えた音楽コース学部4年生の10名前後の出演者によって大学内の講堂で上演される、小規模な取り組みである。一方、中央短大は、全学に及ぶ大掛かりな取り組みで、かつ全学生が地域の子どもたちと共に取り組むという本格的な試みという点で、規模においても大きく異なる。こうした意味でも、同じ教員養成機関という視座から見ても、中央短大の特色ある実践の成果をひもとくことは、多くの示唆が得られるものと考えられる。

2. 新潟中央短期大学ミュージカル—27年間の取り組みの成果—

(1) 全員参加・一人一役で役割意識を高める

中央短大のミュージカルは表現活動指導法の授業の一環として、学生が主体となり、学内が総力をあげて取り組んできた。1986(昭和61)年から続く伝統行事である。このミュージカルの実践は、今年で第26回目の上演を迎えた。2003(平成15)年には、文部科学省より「特色ある大学教育支援プログラム」にも採択されており、地域貢献という観点からも、県内外からの高い評価を得て既に久しい。

実践に当たっては、2年生が1年生に在学中から取り組みを開始し、翌年の2年生となった5月に市内の加茂文化会館を会場に上演される伝統となっている。4月に入学したばかりの1年生も活動に取り組んで、「リズム体操」や「ぬいぐるみショー」などに出演する。ミュージカルの上演は、学生約160名、地域の子どもたち40～60名の総勢約200～220名もの規模で行われ、来場者は、午前と午後の2回の公演で1800名を超える。

この本番をめざして学生たちは、教員の助力を得ながら脚本、音楽、美術などを手分け

して担当していく。支援に携わる教員は常勤の教員に加えて、特別指導講師による発声法の個人レッスンや全体の演出指導などの協力を得ているため、合わせて7名の指導者がかわる。筆者の斎藤は、毎回の演目に使用されるオリジナル曲を作曲する他、学生が練習時に活用できるように、歌唱練習、ダンス練習のためのBGMのデモテープを別途制作するなど、バックアップに専念して上演を支えている。また、斎藤はこうしたミュージカル活動が、学生に音楽的な表現力といった芸術面の学びをもたらす以上に、実に様々な意識の変容をもたらしていると実感してきた。例えば、学生一人ひとりが持つ潜在能力の掘り起こし、制作過程における計画性・コミュニケーション能力、トライ精神などの獲得などの面からも、大きな効果をあげていると捉えている。また、この取り組みでは、「自ら考え、答えを出す」をモットーとしていることに加え、制作過程における特徴として、「学生が全員参加」であることを掲げている。すなわち全員が参加意識、役割意識を持つために、役者をやりながら舞台裏の仕事もこなす、基本的には「学生の手作り」の手法を取っているのである。そのために、中央短大ミュージカルは他の団体のミュージカルよりもはるかに制作過程における準備段階や話し合いに多くの時間をかけている。

実例を挙げたい。ミュージカルの役柄決定には台本をもとにオーディションが行われるが、審査員である教員、学生は結果発表に多くの時間をかける。それはオーディションを受けた学生それぞれに様々な長所があるのに役柄が限られているためでだが、その場合でも審査する側はそれらの学生たちのために台本に変更を加えてまでも新たな役柄を作ることが多い。たとえ望んだ役柄に選ばれなかった学生でも、参加意識を損なうことのないようにするための一つの工夫である。

またこのようにして役柄が決定した後は、まずその役柄ごとに練習をすることになるが、その段階においても話し合いに多くの時間をかけている。たとえば台本上のある場面において群舞があるとすると、その場面の制作に関わる学生は、出演者、総監督、振付、音響、大道具などの学生である。総監督や音響に携わる学生は台本全体あるいはミュージカル全体を把握している必要があり、そうした視点から台本上の場面にアプローチすることができる。しかしその他の学生、特にその場面の出演者は、その場面に注力することによって局所的な視点になりがちであり、出演場面の限られた学生ほどその場面にかかる意気込みが大きくなることによって、その傾向は強い。このようなことは、教員主導のあるいは教員の強いリーダーシップのもとでは起こりえないが、学生主体の、また全員参加型のこうした活動では避けられないことであり、必要なことだと筆者の斎藤は捉えている。このような場合でも学生たちは総監督を中心に話し合いを重ね、自分たちで「答えを出し」ていき、その中で学生たちは、全体の中での自己表現、チームとしての表現、あるいは他者の表現を自発的に学んでいくと考えられるのである。

筆者の斎藤が担当してきたこれまでの経験から、本番につながるミュージカルを作る過

程で学生たちは、さまざまな挫折や葛藤を繰り返しながら新しい意識に目覚めたり、時には意見をぶつけ合ったりしながらミュージカル制作に取り組んできている。そして、それらを経験することによって成長していき、その成長の仕上げが見事に本番の上演へと導かれることを体験してきた。つまり、結果としてのミュージカル上演はもちろん重要なことだが、それにも増してそこへ至るまでの道程にこそ意味があり、中央短大ミュージカルに関わる教員はそのような制作過程における計画性・コミュニケーション能力の獲得や、参加意識、役割意識を学生が持つことによって他者と協働する力を育むことにこそ目標を置くべきであると斎藤は考えるのである。

毎年、上演後の学生たちは、ミュージカルを作るプロセスで得たコミュニケーション能力、自主性、問題を解決する力を身に付け、総合的な表現能力にもが高まりが認められる。

そして、全ての学生が何らかのキャストとして舞台に立ち、制作スタッフとしても参加するため、全学生が何らかのセリフやダンスなどを担当すると同時に、大道具、小道具や衣装などの制作といったさまざまな役割分担が生じることとなり、一人一人の学生に参加意識の高揚が見られるなど、他者と協働する力がより育まれてきていると捉えている。

各自が役割意識を持つことで、前向きに活動に取り組めるようになるという成果は、上越教育大学附属中学校において、今年で15回目の伝統を迎える、生徒による創作ミュージカルの上演においても同様の成果が見られた⁷⁾。一人一役は、同中学校において7年前から採用された新しいアプローチでもあり、中央短大の実践共々、大きな改革をもたらした。

(2) ミュージカル上演後の学生への意識調査から

さまざまな改革を例年盛り込みながら、中央短期大学のミュージカルは既に昨年までの通算25回の上演を達成してきている。次に掲げるは、2010年度、第25回の上演「ぼくはスサノオ」に取り組んだ、2年生96名(女子82名、男子14名)を対象とした、ミュージカル上演後の学生への意識調査から得られたものである。本論では学生への全7項目の質問の中から次の4項目に焦点を絞って、記述された回答をまとめたものである。

(a) ミュージカルに取り組んで良かったこと

- ・自分が希望した役ではなかったが、ミュージカルを楽しむことができてよかった。
- ・当初はミュージカルに参加したくないと考えていたが、オーディションを受け、仲間と競い合い、皆で力を合わせ、成長できたと感じている。ミュージカルを完成させたことで自信がつき、他のことも頑張りたいという気持ちになった。
- ・当初、他の演目に取り組みたかったという思いもあったが、結局、何の演目をやるかではなく、誰とどう創り上げるかが大切なのだと気付いた。

(b) ミュージカルに取り組んだ後の反省点

- ・ダンスが練習までに作れず、みんなに迷惑をかけてしまった。

- ・練習の組み立て方を工夫する必要があった。
 - ・練習の時間配分も工夫する必要がある。
 - ・役によって全く練習の必要がない役もあった。
 - ・係活動や役割の活動などもっと計画的にやればよかった。
 - ・自分の出番ではない時、ほかの人の演技をちゃんと見ておくべきだった。
 - ・作品の中に学生の意見をもう少し取り入れるべきだった。
 - ・定刻に集まらない人が多く、開始時間が遅れたり、予定を変更したりした。
- もし、練習内容が事前に示されていれば、遅れずに集合する人も多かったと思う。

(c) 一年生に受け継いでもらいたい事柄

- ・パート練習をおろそかにせず、皆で協力して楽しく練習取り組んで欲しい。 団結力は大切。
- ・ミュージカルの最後に歌う「再び会える日」を歌って欲しい。毎年歌い継いでいる曲であり、次の年も聴きに来ようと思う観客もいるはず。ぜひ大きな声で胸を張って歌って欲しい。
- ・一人で完成させるものではないから、皆で意見を出し合って取り組んで欲しい。
- ・すでにこの短大の「伝統のミュージカル」。一年生全員団結して、いい思い出になるようなミュージカルにしてもらいたい。
- ・何か不満があったら総監督や先生に相談して、仲間との仲を大切にしたい。
- ・ヒップホップ系のダンスを取り入れて、格好いい踊りを披露して欲しい。
- ・皆のやる気を出すためにも、本番までのカウントダウンを作ったほうが良いと思う。
- ・メイク係では早めに行動し、先生方と何回も意見を出し合って欲しい。
- ・仲間と協力して恥ずかしさを無くして表現すること。
- ・最後の手拍子、本番前の円陣を受け継いでほしい。
- ・早く大道具の準備を終わらせ、役柄の練習に取り組む。
- ・もめごと必ずあると思うが、しっかりと話し合い、周りの仲間と協力して、創り上げて欲しい。
- ・リズム体操、リズム拍手、そしてミュージカルに対する熱意。
- ・皆でダンスをして活動に入ること。
- ・計画性を持・係活動は本番が近づくにつれ忙しくなるので、早めに進め全体に連絡することも大切。

(d) ミュージカルを制作し、何を学び、何が見えてきたか

自分の役（キャスト）を作り上げる過程で

- ・役になりきるのがとても難しいことを学んだ。
- ・人前で歌う、踊る、セリフを言うことを通して、客観的に自分の表現を見直すことの大

切さを学んだ。

- ・ミュージカルは個人で作るものではなく、皆で力を合わせて作るものだからこそ、人の意見を聞くことが大切だと思った。
- ・普段の練習とやる気が大切だと思った。制作過程では普段のその人の人柄がとてもよく出てくるものだと感じた。私はバレエを踊る役であったが、踊ることだけが役割ではなく、ステージ上では常に役になりきってしっかり参加することが大切だと学んだ。

制作方（スタッフ）の経験から

- ・子ども係を担当した。自分たちで想定していたことと、子どもたちと実際に一緒に活動してみて違うことがたくさんあった。子どもにどう伝えたら分かってもらえるのか、どう伝えたら集中するのかなど、子ども係を通して少し分かった。
子どもたちと曲を作り上げた達成感はとてもいいものだった。
- ・子どもたちの振り付けを担当した。どのくらい踊れるレベルなのかわからなかったため、事前に学校との先生と打ち合わせを念入りにしておくべきだったと思う。
- ・メイク係を担当した。メイクは役の雰囲気、その人の顔立ちによっても作り方が違い、自分たちの考え方や、一方的な理由で作ってはいけなと感じた。陰で支えるスタッフ、一年生、先生方、地域の方々などの協力があり、文化会館という演じる場があってこそ完成するのだと改めて感じた。

(3) 意識調査から読み取れる学生に培われた多様な力

通常の授業時間内における表現活動であれば、遅刻や欠席は自己責任として、自らが反省することにとどまるが、協働型の制作では他者にかかる迷惑についても真摯に受け止めることができるようになるといった、学生の意識の変容が見られることは興味深い。

また、「一年生に受け継いでもらいたい事柄」及び、「ミュージカルを制作し、何を学び、何が見えてきたか」という項目への学生の記述からは、仲間が団結して表現活動にまい進することの重要性への気付きが多く読み取れる。さらには、運営面においても、スムーズな運びができるように、失敗を次に生かして欲しいという心遣いも少なくない。加えて、中央短大の伝統となり、先輩から引き継がれてきたセレモニーを後輩にも受け継いで欲しいという強い思いや願いが伝わってくる。

今日の学校教育において強く求められている表現・コミュニケーション力育成をめざす時、協働して学びを生み出す⁸⁾、いわば協働型の表現活動を体験した学生たちの意識変化の記述等からも、実に幅広い気付きをもたらしていることが読み取れる。また、学生が協働の表現活動の過程で関係を育みながら、表現することの楽しさを共有し、互いの表現を高めていく様子もうかがえる。

こうした姿からも協働型の表現活動によって、音楽表現の微妙なニュアンスにも配慮し

ながら互いに主張し合ったり、譲り合ったりする創作活動に取り組む過程を経て、音楽的な感性と同時に協調性、社会性をも培っているものと捉えられる。今次学習指導要領の改訂を機に学校教育現場において、「他者とかがわって共に創る活動」が提唱される中で、学生たちによるグループ活動は、彼らが協働する機会をもたらすことにおいて極めて有効な取り組みであると考えられることから、改めてこうした取り組みの意義と共に教員養成におけるカリキュラムの充実が望まれる。

これらの学生の意識の高まりは、上演後の感想を記述するために配布されたB4サイズの紙面一杯の記述で埋めつくされているケースが大半を占めている。この多様な意識が日常の学びの視点にも拡げられ、その他の関連する授業科目においても、ミュージカルの学びの成果をもたらす学生の学習意欲が、ダイレクトに及んでいる次の例にも注目したい。

筆者である斎藤の担当するゼミの2009(平成21)年度の卒表論文には、『魅せる歌～ミュージカルソング～』、あるいは、『保育者に求められる「歌唱指導」と「ピアノ伴奏」』と題した研究課題に取り組んだ学生の論文があり、ミュージカル実践の学びが研究に活用され、記述されているのである。ミュージカル実践を経た学生が、その体験を踏まえて課題意識を高め、彼らの卒業論文の研究にもたらす成果についての考察についても筆者らは今後の研究課題として取り組んでいきたい。

総括と今後の展望

冒頭でも述べたように筆者らは、音楽を主とした表現活動に携わりながら、他者とかがわることを苦手とする学生が増えてきていることに大きな課題を感じてきた。その一方で、音楽を専門としない多数の教員が保育あるいは、初等教育に携わっている現状等を鑑みるならば、教員の音楽技能の差異にかかわらず創造的な学習に取り組むことができる、大学・短期大学における表現活動のカリキュラム改善も、並行してはかられていかねばならないだろう。

筆者の時得は、芸術教育カリキュラムの日米比較研究を継続してきた経緯から、米国の教員養成機関において、我が国の小学校における「音楽づくり」や、中学校における「創作」の活動の領域に相当する、子供の創造性を育むための多彩な教師教育のための実践が積極的に育まれていることに着目してきた⁹⁾¹⁰⁾。翻って今日の我が国の保育士・初等中等教育の教員養成機関の多くが、ともすれば「歌唱」のための指導や、ピアノ練習に代表される「器楽」指導のためのカリキュラムに偏る傾向があるのではないだろうか。今後、我が国の保育機関や教員養成機関における、各活動の偏りをバランスの取れたものに改善していくためにも、中央短大がミュージカル実践を核として継続して取り組んできた、創造的かつ総合的な、協働型の表現活動のカリキュラム開発が、全国レベルで模索され、実践されていくことが望まれよう。

本実践に携わってきた筆者らは、学生の自主的な創作表現活動で培われる力を視座として、次の点についても注目した。ミュージカルの制作過程における協働による様々な学びが、音楽や舞踊、演劇、美術の各分野にも応用できる表現力として活用していく発想が学生らに培われていくという成果である。すなわち、音楽のみならず、舞踊や演劇といった各芸術ジャンルの表現力を横断的に高めていく学習の成果が、「新しい表現方法への気付き」「多彩な表現方法の創出」ひいては「表現そのものの解釈の深まり」等に導かれている成果が、学生へのパフォーマンス評価から認められたのである。このことから、今日的な学力とされる「創造力」や「コミュニケーション力」などの幅広い力が、ミュージカル実践などの総合表現活動によって、より効果的に培われるといった仮説にも導かれる。これらを立証していくためにも、芸術のジャンルを超えた総合表現活動の学びの成果について、筆者らは今後も継続的な研究に挑んできたいと考えている。

中央短大における長年の実践がそうであったように、あまたの活動の中で表現の核となり、基盤となっているのが音楽表現であり、このことから音楽表現が、総合性、拡張性をもつという特徴が改めて浮き彫りにされた。この音楽表現による活動がもつ総合性、拡張性を生かした、幅広い学びとコラボレートさせたミュージカル実践などの有効性が、この点でも示唆されよう。現状における試みの第一歩としては、大学や短期大学における学習活動そのものに、音楽と様々な活動とのかかわりを題材とした表現活動を組み込むことが有効ではないかとした発想に至ったのである。

今日の学校音楽において、音楽科が他教科との関連の希薄さから孤立し、さらには時数削減といった現状を招いたことなどを鑑みるならば、こうした視点からも大学や短期大学におけるカリキュラム編成において、今後は積極的に音楽以外の表現領域との横断的なカリキュラムの展開が望まれるのである。一方で、舞踊や演劇とのかかわった実践のレベルの向上をめざす際の課題も残る。昨今の学生はマスメディアの影響で、男女ともに舞踊の活動に積極的に取り組む者が多く、ヒップホップなどのダンススクールに通った経験を持つ学生も少なくない。これに比して、演劇分野の経験を豊富にもつ学生は極端に少なく、演技指導等の支援は未だに課題であることは否めない。今後はゲストティーチャーの協力を仰ぎながら、この演劇の基礎を育むことにも努めることで、バランスの取れた、総合的な表現技能の全体の高まりが実現できるものと思われる。

本来、創作表現活動そのものが協同的・探究的な活動である。これら協働する実践場面において、彼らは他者とのかかわりを通じて、自尊感情、他者への思いやりの気持ちなど、様々な気付きを得ながら、互いに表現を共有することを獲得していくのである。その過程で得た様々な感動体験が、学生たちの表現・コミュニケーション力はもとより、彼らの豊かな感性そのものをはぐくむ契機となることを願いながら、今後も保育士・教員養成の大学や短期大学に学ぶ学生たちが、多彩な表現力を獲得していくことを期待してやまない。

参考資料 2

ミュージカルの活動にかかわると考えられる主なカリキュラムの例¹¹⁾¹²⁾

専門教育科目／必修科目

| | |
|----------|-----------------------|
| 人間関係指導法 | 人とかかわりを育てる保育者の援助 |
| 環境指導法 | 自然の中で生きる幸せと喜びを幼心に育む |
| 言葉指導法 | 子どものことばの発達と生活環境、援助 |
| 表現指導法 | 身体表現活動の技法と創作、実演 |
| 音楽Ⅰ | 乳幼児の心身の発達に向けた音楽教育のあり方 |
| 器楽Ⅰ（ピアノ） | 子どもの反応を見ながら演奏する |
| 図画工作Ⅰ | 美術、造形の基礎、表現の方法 |
| 幼児体育Ⅰ | 子ども主体の運動あそびを指導する |
| 総合研究 | 卒業研究ゼミナール |

選択科目／その1

| | |
|-----------------|---------------------------------|
| 発達心理学Ⅱ | 子どもの育ちと保育実践の関係を見る |
| 保育内容総論Ⅱ | 保育を計画し模擬的場面で実践する |
| 乳児保育Ⅱ | 保育士に求められる乳児と親との関わり方 |
| <u>表現活動指導法*</u> | <u>保育表現技法の習熟とミュージカル、出前保育の実践</u> |
| 器楽Ⅱ | ピアノ、ギターの即興的、応用的演奏法 |
| 図画工作Ⅱ | 制作を通して美術表現を学ぶ |
| 幼児体育Ⅱ | 子どもの心と体を揺り動かす遊びの指導 |
| レクリエーション実習Ⅰ | レクリエーション活動の基礎的技術 |
| 保育実習Ⅱ | 保育所での観察・見学・参加・責任実習 |

選択科目／その2

| | |
|----------|--------------------------|
| 幼児教育教材研究 | 身の周りにある素材を用いて遊びを豊かにする |
| コンピュータ基礎 | パソコンによる情報機器操作と基礎処理能力を高める |

*選択科目／その1「表現活動指導法」について

ミュージカル製作のプロセスとしての科目として位置付けられており、平成13年度より表現系科目の総合的な営みとして開設している。この授業で学生たちは、学園祭において地域の子どもたちとの交流の場として催される「子どもワールド」における演目（演劇・合唱・合奏・リズム体操など）の製作を経験し、それをもとに総合芸術としてのミュージカルの共同制作を行う。この授業の担当には、体育・図画工作・音楽の教員がかかわり、演技指導には特別講師として外部より演劇の専門家を招致している。

参考資料 3

過去に上演されたミュージカル演目の一覧¹³⁾

| | | |
|-------|------|---------------------|
| 1986年 | 第1回 | 窓ぎわのトットちゃん |
| 1987年 | 第2回 | しらゆきひめ |
| 1988年 | 第3回 | マッチ売りの少女 |
| 1989年 | 第4回 | ぼくはスサノオ |
| 1990年 | 第5回 | さるの王様 |
| 1991年 | 第6回 | おいしいれの冒険 |
| 1992年 | 第7回 | ミツバチマーヤの冒険 |
| 1993年 | 第8回 | オズの魔法使い |
| 1994年 | 第9回 | ピーターパン |
| 1995年 | 第10回 | ぼくはスサノオ |
| 1996年 | 第11回 | 不思議の国のアリス |
| 1997年 | 第12回 | くるみわり人形 |
| 1998年 | 第13回 | 新ドン・キホーテ |
| 1999年 | 第14回 | おいしいれの冒険 |
| 2000年 | 第15回 | ピーターパン |
| 2001年 | 第16回 | ぼくはスサノオ |
| 2002年 | 第17回 | オズの魔法使い |
| 2003年 | 第18回 | 不思議の国のアリス |
| 2004年 | 第19回 | ヘンゼルとグレーテルとゆかいな仲間たち |
| 2005年 | 第20回 | 私の大切なもの～マツユキソウの奇跡～ |
| 2006年 | 第21回 | ピーターパン～仲間がくれた勇気～ |
| 2007年 | 第22回 | オズの魔法使い |
| 2008年 | 第23回 | 不思議の国のアリス |
| 2009年 | 第24回 | ヘンゼルとグレーテル～大切な絆～ |
| 2010年 | 第25回 | ぼくはスサノオ |
| 2011年 | 第26回 | ピーターパン |

註

- 1) 学部1年生及び大学院1年生(免許プログラム)を対象とした前期必修科目「人間教育学セミナー」において、全15回の授業の中で「表現・コミュニケーション能力を培う活動」等、幅広い活動が組み込まれ実施される。
- 2) 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 p86.
- 3) 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説保健体育編』東洋館出版社 pp.117-132.
- 4) 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説体育編』東洋館出版社 p.52, pp.52-54.
- 5) 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領』第2章第5節「音楽」pp.74-79、第6節「美術」pp.80-84、第4章「総合的な学習の時間」東山書房、pp.116-121.
- 6) 2010年7月8日(木)、12日(月)に実施した各1回90分の講義
- 7) 時得紀子(2009)「総合表現活動を総括する」時得紀子編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社、pp.79-102.
- 8) お茶の水女子大学附属幼稚園・同附属小学校・中学校(2006)『協働して学びを生み出す子ども

を育てる—幼・小・中12年間の学びの適時性と連続性を考えた連携型一貫カリキュラムの研究開発—」文部科学省研究開発学校発表会発表要項NPO法人お茶の水児童教育研究会 pp.27-50.

- 9) Tokie N., Endo Y., Kami M., & Muto T. (2008). Effectiveness of Integrated Arts Curriculum for Japanese Students and Plans for the Future Model in Japanese Schools : To Cultivate Communication Skills : Bologna, Italy : Full Paper Proceedings of the 28 th ISME World Conference, pp.297-303.
- 10) 時得紀子 (2010)「総合表現型カリキュラムの実践への一考察」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教育実践学論集第11号、pp.155-166.
- 11) 新潟中央短期大学 (2011)“幼児教育学科 TOTAL GUIDE BOOK” p.17.
- 12) この他、カリキュラムの一環としてミュージカル講演を通じ、地域と密接に結びついた文化・芸術イベントとして機能させるため、・地域の子どもたちとの共演、・近隣小・中学校の総合学習の場としてミュージカル製作、・練習現場の見学また製作アドヴァイスにも取り組んでいる。
- 13) 新潟中央短期大学 (2011)“幼児教育学科 TOTAL GUIDE BOOK” p.10.

参考文献

- 時得紀子 (2002)「子どもを表現者にする総合的な学習—豊かな表現力を培うことでコミュニケーションを深める—」田中博之編著『総合的学習のカリキュラムデザイン、第3巻総合表現型カリキュラムを創る』明治図書、pp.43-52.
- Tokie N. (2009). The Importance of Integrated Arts Curriculum for Japanese Students : Increasing Motivation for Learning and Cultivating Self-Expression. Shanghai, China : Selected Full Paper Proceedings of the 7 th World Conference of the Asia-Pacific Symposium on Music Education Research, pp.473-478.
- Tokie N. (2010). Using Cross-Curricular Classes to Help Meet the Mandated Goals of Japanese Music Classes. Beijing China : Full Paper Proceedings of the 29 th ISME World Conference 2010, pp.203-206.
- 時得紀子 (2011)「初等教員養成におけるリトミック指導の一考察—創造力と課題解決力を培う音楽づくりを中心に—」ダルクローズ音楽教育研究日本ダルクローズ音楽教育学会学会誌第35号 pp.33-43.

付記

- ・本研究は2010-2012年度科学研究費補助金（基盤研究（C）研究代表者：時得紀子、課題番号：2253095）における、新潟中央短期大学の協力を得た共同研究の一環をなすものである。



写真1 新潟中央短期大学学部2年生によるミュージカルに向けたダンスの練習の様子



写真2 上越教育大学学部3年生による表現活動を発表し合う授業の様子